

[A] 第1回衆議院議員総選挙—テキスト P65 対応—

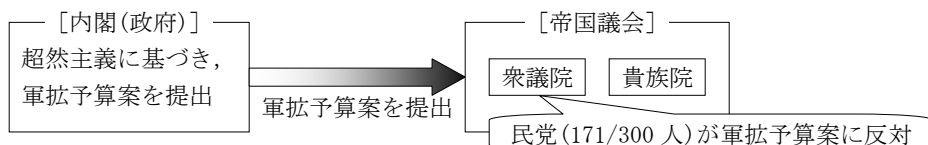
1881年の国会開設の勅諭では、10年後の1890(明治23)年に国会を開くことが約束された(国会開設の勅諭では「国会」を開くとしたが、実際には「**帝国議会**」という名称が用いられた。戦後の1947年に、「帝国議会」は「国会」となるので、戦前は「帝国議会」、戦後は「国会」と考えるとよい)。そのため、1890年には国会が開かれることになるので、その議員を選出するための総選挙を行わなければならない。そこで、**第一次山県有朋内閣**の**1890年**、**衆議院議員選挙法**に基づいて第1回衆議院議員総選挙が行われた。総議席数**300**をめぐって行われたその選挙結果は以下のようなものだ。

—<第1回衆議院議員総選挙の結果(総議席=300議席)>—

民党(反政府政党)……**立憲自由党**(130議席)・**立憲改進黨**(41議席)→民党の総議席数171議席
吏党(政府支持政党)……**大成会**(79議席)・その他(50議席)→吏党の総議席数129議席

ここで重要なのは、反政府政党である**民党**の**立憲自由党**(130議席)と**立憲改進黨**(41議席)の議席数を足すと171になり、過半数を優に超えるということ。つまり、これから政府が陸・海軍の軍事費を増額させるために、軍事費拡大の予算案を提出しても、171/300の議席をもつ民党がそれに反対する以下のような構図が出来上がる。

—<初期議会の構図>—



そのため、第1回帝国議会～第6回帝国議会までは、政府の提出する軍拡予算案などに対して、民党が過半数を超える議席を利用してそれに反対する状況が続く。これを**初期議会**と呼ぶ。なお、現在の通常国会が150日間を会期とするように、帝国議会も右のような会期があり、それぞれ第1回帝国議会を略して第1議会、第2回帝国議会を略して第2議会などという。

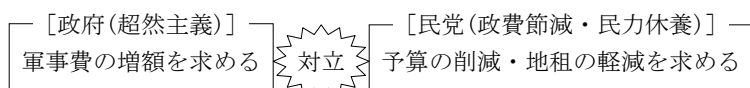
—<初期議会(第1議会～第6議会)の会期>—

第1回帝国議会(第1議会)…会期=99日間
 第2回帝国議会(第2議会)…会期=30日間
 第3回帝国議会(第3議会)…会期=40日間
 第4回帝国議会(第4議会)…会期=92日間
 第5回帝国議会(第5議会)…会期=33日間
 第6回帝国議会(第6議会)…会期=19日間

第一次山県有朋内閣のスローガンは、前内閣の黒田清隆首相が演説した「**超然主義**」方針を引き継いでいる。超然主義とは、政府の政策は政党の意向に左右されずに行われなければならない、というもの。簡単に言えば、政党は「予算を削れ」・「税金を下げろ」などと文句を言うてくるだろうが、政府はそういった主張にはとらわれず、超然とした立場で(超然とは物事に関心を持たず、平然とした様子のこと)、軍事費の増額などを推し進めていくからな、ということ。

一方の立憲自由党・立憲改進黨などの民党は「**政費節減**」(予算を削れ)、「**民力休養**」(地租を下げろ)というスローガンを掲げている。ということは、当然政府のスローガンと民党のスローガンは真っ向から対立することになる。

—<政府と民党の対立>—



[B] 第1議会—テキスト P65 対応—

1890年、第1回帝国議会(第1議会)が開かれた。首相である山県有朋は、施政方針演説(首相がその年の政府の基本方針・政策について示すために行う演説)において、以下のような主権線・利益線演説と呼ばれる演説を行った。

☐ 山県有朋首相の主権線・利益線演説『帝国議会衆議院議事速記録』

予算中ニ就キマシテ最歳出ノ大部分ヲ占メルモノハ、即陸海軍ノ経費デ御座イマス。……蓋国家独立自衛ノ道ニ二途アリ。第一ニ主権線ヲ守禦スルコト、第二ニハ利益線ヲ保護スルコトデアル。
(そもそも国家の独立・自立の道には二通りあり、第一には主権線(国家主権の範囲)を守ること、第二には利益線(国家の政治的・経済的安定を保証する勢力範囲にあたる朝鮮半島)を保護することである。)

山県有朋が述べた内容を要約すると、主権線(日本国内)と利益線(朝鮮半島)を守るためには、陸軍・海軍の軍事費を増額させないといけない、ということ。この当時は、ロシアがシベリア鉄道の起工を進めており、東アジアに進出する気満々であった(これを南下政策という)。ゆえに、日本にとって、脅威となるロシアに対抗するためには、主権線(日本の国家主権の範囲＝日本国内のこと)・利益線(日本の利益が絡んでくる範囲＝朝鮮半島のこと)を防衛することが必要不可欠となる。そのためには、陸軍・海軍の軍事費の拡大するべきである、と説明したわけだ。

ところが、政府支持側の吏党 129 名は軍事費増額に賛成してくれるものの、「政費節減(予算を削れ)」をスローガンに掲げる民党にとっては、そんなことは関係ない。171 名の民党がこぞって反対を主張したため、軍拡予算が成立する見通しが出なかったんだ。そこで、困った山県有朋首相は、政府きっての切れ者陸奥宗光を呼び出す(陸奥宗光はカミソリのように頭が切れることからカミソリ陸奥というあだ名をもつ)。

山県「あななあ、どうかして軍拡予算を成立させたいんだけど、良い手立てないかな？」

陸奥「う〜ん、余裕っすよ。切り崩しを行えばいいだけですから。」

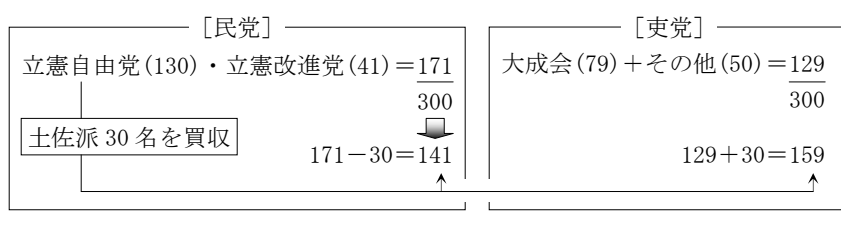
山県「どうのこと？」

陸奥「例えば、立憲自由党の 130 名は全員が一枚岩になっているわけじゃありません。彼らには出身ごとに派閥があつて、その中には土佐派という土佐藩出身者が 30 名程います。」

山県「ほう。」

陸奥「彼らを買収してしまえばいいんですよ。そうすると、以下のようになりますよね？」

＜立憲自由党土佐派の買収＞



立憲自由党の土佐派 30 名を買収すれば、政府の軍拡予算に賛成する人数は、吏党 129 名に 30 名追加され 159 名となる。つまり、過半数を超えるので、軍拡予算を成立させることができる。こうして、土佐派の裏切りにより、第一次山県有朋内閣は、見事に陸海軍の軍事費増額を成立させたわけだ。でも、裏切られた残りにメンバーからしてみれば堪ったものじゃない。特に、東洋のルソーと呼ばれた中江兆民なんかは「無血虫の陳列場だ」とブチ切れて、議員を辞職してしまったんだ。

でも、初っ端の第1議会から買収されるとは立憲自由党もイメージダウン甚だしいよね。そこで、

イメージ回復をはかって、この後に旧来の自由党へと名称を変更したんだ(ゆえに、立憲自由党という名称が使われていたのは、第1回衆議院議員総選挙と第1議会のみで、それ以降は自由党になる)。なお、買収された土佐派の連中は、自由倶楽部という政党を立ち上げることになるが、その後リーダーを失った彼らは自由党に復党している…。おいおい、こつらは恥というものを知らんのかい…。

[C] 第2議会・第3議会—テキストP65 対応—

さて、陸海軍の軍事費増額に成功した第一次山県有朋は、お役御免ということで、内閣を次の第一松方正義内閣に譲る。この第一次松方正義内閣の目標もやはり軍事費を増額させること。そこで、第2議会が開かれた1891年には、海軍軍事費の増額を求めた予算案を衆議院に提出した。

ところが、先ほど買収されてしまった土佐派が復帰した自由党が、今度こそは買収されまいと徹底的に反対。つまり、また先ほどの171名が軍拡予算に反対したわけだ。なので、再び軍拡予算を成立させるのが難しくなってしまった。そんな中、業を煮やした海軍大臣の樺山資紀が一世一代の演説を展開する。

樺山「ちょいと、お前ら聞かんかい。お前ら民党は、我々政府に対して薩長の藩閥政府だとかいろいろ文句を言ってくるがのう、今日の日本の発展と平和をもたらしたのは誰のおかげだと思ってるんや！その薩長のおかげやろうがい！」

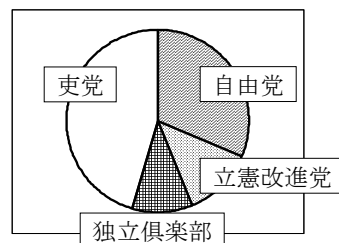
民党「……。何を言うてるんや、お前は！薩長に任せていたから、こんな日本になってしまったんやないかい！」

樺山「なぬ〜？お前、薩長をバカにしよったな！乱闘じゃ！」

こうした蛮勇(向こう見ずの勇氣)に満ちた彼の演説を蛮勇演説という。でも、これによって議会は収拾つかなくなってしまって乱闘騒ぎ。そのため、第一次松方正義内閣は衆議院を解散したんだ。

衆議院が解散されたので、衆議院議員はリセットされて、1892年に第2回衆議院議員総選挙が行われることになる。でも、どうせ、また民党が勝利するのは目に見えているよね。先ほどの第1回総選挙から2年ほどしか経っていないのだから。

そこで、政府は内務大臣の品川弥次郎のもと選挙干渉を行う。選挙干渉とは、簡単に言えば選挙において嫌がらせを行うこと。例えば、投票所にチンピラとかを集めておいて、民党に票を入れようとする有権者に圧力をかけて吏党に票を入れさせるとか、明らかに民党勝利の場合には、投票箱を持って行って海に捨てちゃうとかね。…なかなかやりますな…。その結果、自由党は大幅に議席数を減らして(94議席)、右のようになった。



結果を見てみると、吏党は137議席までは伸びたけど、結局は過半数を超えることはできなかった。なので、政府にとって不利な状態で第3議会が開かれるんだけど、まともな話し合いなんかできないわけない。民党の自由党などからしてみれば、選挙干渉のせいで大幅に議席数を減らしているし、この選挙干渉の結果400名を超える死傷者が出ている。だから、「先ほどの第2回総選挙の際に、政府が行った選挙干渉のせいで、こんなにも死傷者が出ている。これを指示したのは内務大臣の品川弥次郎さんだそうですね！どう責任とるんだよ？」と、品川弥次郎の選挙干渉の責任追及が行われ、品川弥次郎は内務大臣を辞任することになり、さらに内閣に対してもの火の粉が飛んで、第一次松方正義内閣も責任をとって総辞職することになったんだ。なお、辞任した品川弥次郎は、政府の選挙干渉にかかわらず勝利することが出来なかった吏党に対して、それを強化する必要があると考えた。そこで、西郷従道らと国民協会という、以前の大成会をバージョンアップさせた吏党を結成した。

[D] 第4議会・第5議会・第6議会－テキスト P65 対応－

第一次松方正義内閣の後を受けて、**第二次伊藤博文内閣**が**元勳内閣**として組閣された。元勳内閣とは、伊藤博文(首相)・井上馨(内相)・松方正義(蔵相)・大山巖(陸相)・山県有朋(司法相)・黒田清隆(通信相)などの元勳(のちの元老)だけで大臣を構成した大物内閣のこと。そして、この大物政治家による力で、民党を抑えようとしたんだけど、どうせまた予算案に反対されるのは目に見えている。そこで、伊藤博文は天皇の力を借りて、海軍の軍事費増額を実現しようとしたんだ(第2議会の頃から、海軍の軍拡予算案が成立していないため)。そこで、第4議会で、天皇から出されたのが**建艦詔書**(**和衷協同の詔書**)というものだ。これは、「頼むから政府の海軍の軍拡に協力してやってくれよ。俺も宮廷の費用とか節約して何とか頑張るからさ」という、民党など議会に対して天皇から出された詔書。…ちよいと、これは反則でしょ？天皇から協力してくれやと言われてしまったら、議会だって断ることはできない。そのため、この建艦詔書によって、ようやく政府は海軍の軍事費拡大に成功したんだ。

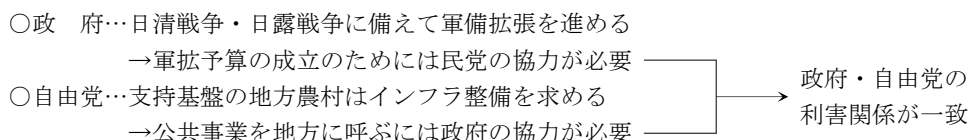
でも、この第4議会の建艦詔書を経て、自由党はあることに気付いた。「いったい、自分たちは何を成し遂げることができたのだろうか?」。

民党のスローガンは「政費節減(予算を削れ)」・「民力休養(地租を下げろ)」だったけど、第1議会では土佐派の買収、第4議会では建艦詔書によって軍事費を増額させられてしまった。なおかつ、地租軽減案を議会に提出しても、衆議院では通過するものの、貴族院で否決されてしまって、にっちもさっちも行かない。このように、政府と対立するだけでは、何も生まれない。それであつたら、政府といがみ合うのではなく、むしろ政府に譲歩・協力してみたら何かが生まれるかもしれない。こうして、第4議会から自由党は政府に接近するようになった。では、なぜ自由党は政府への接近という方向転換を図ったのだろうか?

そもそも**自由党の支持基盤は地方農村**にあつた。そうした地方では、未だインフラ(生産や生活の基盤となる道路・鉄道・通信施設などの産業基盤、学校・病院などの社会福祉・環境施設)整備が行き届いていないため、地方農村ではインフラ整備が求められていた。そして、こうした公共事業を地方に誘致するためには、政府(特に**警察・地方行政**を管轄する**内務省**)の協力が必要不可欠であつた。一方、日清戦争・日露戦争に備えて軍備拡張を進める政府にとっては、軍拡予算を成立させるために、民党との協力が不可欠であつた。

こうして、支持基盤である地方に公共事業を呼びたい「自由党」と、軍備拡張を進めたい「政府」との利害関係が一致する。そして、自由党は政府の求める軍拡予算などに協力し、政府は自由党の求める地方への公共事業を展開することで、両者の協力関係が出来上がったんだ。このように、第4議会以降から、自由党は現在の自由民主党へとつながる「**利益誘導型政治**」へと変質していった。

＜政府・自由党の接近＞



こうした目的を背景に、自由党は政府に接近し、与党化していったわけだけど、一方の立憲改進黨からしてみれば面白くない。また、今や政府に接近した自由党が吏党と化したため、もともと吏党であつた国民協会は割を食って、吏党の地位を追われる形になってしまった。つまり、この頃になるともともと民党であつた自由党が吏党と化して、もともと吏党であつた国民協회가民党と化していったわけだ。

こうして、自由党と政府の接近に不満な立憲改進黨と国民協會が中心となって、第5議会の際に構成したのが対外硬派連合だ(もちろんのことだが、政府と接近した自由党は対外硬派連合には入っていない)。これは政党の枠を越えて、時の政府の外交政策を批判するために組まれたグループなんだけど、では時の政府の外交政策とは具体的に何をさしているのだろう？

この頃、政府は江戸時代に欧米列強と結んだ不平等条約の改正を進めていた。当時の外相陸奥宗光は不平等条約を改正してもらうために、外国人の内地雑居を認める譲歩案を考えていた。これまでの条約では、外国人は横浜などの開港場の中に設けられた居留地という外国人居住エリアに住むことを強制されていた。まあ、外国人は居留地と呼ばれる地域以外には住めないってことだね。そこで、外国人が国内のどこでも住むことができるようにしてあげることで(これを内地雑居という)、不平等条約を改正してもらおうとしていたんだ。

それに対して、対外硬派連合は、わざわざ外国のために内地を開放する必要はない、そのまま現在の条約を継続させて、外国人に不自由さを感じさせてやれ(これを現行条約励行という)、という主張を展開して、政府を攻撃したんだ。こうした政府への攻撃が展開されたため、政府は衆議院を解散するに至る。また、第6議会では衆議院で内閣弾劾上奏案が可決したため(内閣不信任案にあたる)、再び政府は衆議院を解散することになったんだけど、これは全く問われないので放っておいてよい。

このように、第1議会～第6議会までは、政府と政党との対立が展開されたわけだけど、その対立は1894年に日清戦争が勃発すると終了する。日清戦争は、日本にとっては初めての本格的な対外戦争だから、さすがに、軍事費の増額に協力しない者はいない。そのため、日清戦争が勃発してから1ヵ月後に大本営(戦時に際して設置される作戦本部)の置かれた広島で第7臨時議会が開かれ、政府から臨時軍事費の増額要求が提出されたんだけど、これは全会一致で全面的に可決されている。こうして、戦争という対外危機をきっかけに政党は政府に協力するという方向に変化していくんだ。

[E] 日清戦争後の議会政治－テキストP65対応－

さて、日清戦争(1894～1895)が終わると、自由党と政府は正式に提携することになる。そして、第二次伊藤博文内閣は自由党と提携していくことを正式に発表したんだ。だから、これから自由党は政府の軍拡予算案や法案の成立に協力するようになるわけだけど、政府に協力するのなら、政府も見合った分の見返りを用意しておかないといけない。そこで、政府も自由党と提携する見返りとして、自由党の総裁である板垣退助を内務大臣に入閣させてあげたんだ。自由党トップである板垣退助が内務大臣に就任すれば、自由党は内務省の権限を利用して、地方に公共事業を誘致することが出来る。つまり、政府と政党の提携ってのは、政党が政府と仲良くして法案・予算案の成立に協力してあげる代わりに、その政党の人間を内閣の大臣ポストをあげるわけだね。

こうした「利益誘導型政治」へと転換した自由党に触発されたのが、立憲改進黨だ。立憲改進黨からしてみれば、「なにい～～！自由党の板垣退助が何で内務大臣に任命されているんだ！」というぐらいの衝撃。そもそも立憲改進黨は、自由党が徐々に政府に接近するようになったことに怒って、第5議会・第6議会でも国民協會らと対外硬派連合を結成して政府に抵抗していた。ところが、日清戦争後になると、その自由党ではトップの板垣退助が内務大臣にまで任命されて、政府の政策に参加するようになってしまった。これを見た立憲改進黨は「自、自由党の奴等うらやましいな…。政府に協力したら大臣のポストをもらっちゃったよ…。」と思うようになった。

そのため、ようやく彼ら立憲改進黨も、この自由党の様子を見て「政府と提携して協力すれば、何かしらの大臣ポストをもらえる」ということを学ぶ。そこで、立憲改進黨は、まず立憲革新党・大手俱樂部・帝国財政革新会・中国進歩党などの小政党を吸収し、進歩党という名前に変更して、自由党と同じぐらいの大規模の大きな政党となる。

そして、次の第二次松方正義内閣の時に、政府と進歩党は提携するようになったんだ(第二次伊藤博文内閣は松方正義・大隈重信の入閣工作に失敗し、第二次松方正義内閣に代わった)。

つまり、旧立憲改進黨の進歩党も、自由党から学んだわけだね。「あ～、自由党みたいに政府と提携すると、大臣のポストももらえるし、こっちの方が得策だ」ってやっと気づいた。だから、第二次松方正義内閣と提携したわけだ。そして、その見返りとして、進歩党のトップである大隈重信が外務大臣のポストをもらったんだ(進歩党は知識人・資本家(特に三菱)などのブルジョワ階級を支持基盤としており、貿易に深く関わる関税自主権が完全回復していないなど、不平等条約の改正が重要であったため、外務大臣に入閣した)。そのため、この第二次松方正義内閣を松方正義の「松」と、大隈重信の「隈」で松隈内閣とも言う。

さて、その第二次松方正義内閣時に制定された法令が1897年の貨幣法。そもそも、日本では、欧米の主流にならって、初めは1871年の新貨条例で建前上の金本位制を採用していたけど、松方正義大蔵大臣のもとで1886年に銀本位制に移行した。じゃあ、なぜその時に銀本位制にしたのか？それはその当時の貿易は中国・朝鮮などアジアと行うことが多かったから。だから、アジアとの貿易をスムーズにしやすいように銀本位制を採用したわけだね。

でも、日清戦争(1894)後の日本は、後の日露戦争(1904)などに備えた軍備拡張が重要になっていった。そのため、外国から兵器・軍艦などの軍需品、鉄鋼・燃料などの軍需資材を購入することが多くなっていた(こうした状況打開のために、鉄鋼の国産化を目指して1901年に官営八幡製鉄所が設立されるが、生産が軌道に乗ったのは日露戦争後であったため、それまでは輸入に頼らなければならなかった)。じゃあ、そういった軍需品や軍需資材はどこから買うの？欧米列強などの金本位制を採用している国から兵器や武器を輸入するわけだね？そこで、欧米から軍需品・軍需資材などを輸入しやすくするために、金本位制に移そうと考えた。そのため、1897年に貨幣法という法律を制定して、日清戦争で得た賠償金2億両の一部を元手に金本位制に移行したんだ。これによって、日本では1円紙幣と交換できる1円金貨(金0.75gを含む)が鑄造され、アメリカとの1ドル金貨(金1.5gを含む)との相場は1ドル=2円に落ち着くことになったんだ。

金本位制に移行して、欧米諸国から軍需品・軍需資材などを輸入して軍備拡張を進めていくわけだけど、軍備拡張を進めるためには、それだけ軍事費も必要になってくる。それゆえ、日清戦争後には、戦後経営などを含めて今まで以上にいっそう軍備拡張のためのお金が重要になってきた。じゃあ、そのお金はどこから確保すればいい？税金を増やせばいいよね。だから、第二次松方正義内閣は毎年一定の税金が確保できる地租を上げようとしたんだ。そこで、松方正義は提携している進歩党の奴らに相談した。

松 方「やっぱりさ、これからは軍備拡張していく必要があるじゃん？」

進歩党「うんうん」

松 方「そのためにはやっぱりお金がかかるじゃん？」

進歩党「うんうん」

松 方「そこで、僕ね。税金のために地租を上げようかと思うんだよね」

…と言った瞬間。

進歩党「地租増徴だけは絶対ダメ！地租を上げてしまったら、僕らに投票してくれた国民の人たちに申し訳がたたないからね！ていうか、地租なんか上げちゃったら、支持基盤の人たちが次の選挙で僕らに投票してくれなくなっちゃうし。だから、地租増徴だけは絶対に反対！」

松 方「でも、やっぱり地租はあげないと無理なんだよ～。頼むよ～」

進歩党「絶対にダメ！それをやろうとするなら、もう松方さんとは提携はしないでやんす」

…と言って、進歩党は松方から離れていっちゃった。だから、これによって進歩党の支持を失った第二次松方正義内閣は退陣することとなったんだ。

松方正義が退陣したので、伊藤博文がまた内閣を組閣して**第三次伊藤内閣**が出来あがった。でも、伊藤もやっぱり松方と同じ意見だ。

伊 藤「いずれは日露戦争など絶対に戦争が起こるわけだから、軍事力を強化する必要がある。そのためには、やはり税金をあげることが不可欠だ。そのためには、やっぱり地租をあげなきゃダメなんだ。だから、自由党か進歩党のどちらかでいいから提携して、地租増徴に協力してくれ」

自由党「地租増徴を目論む伊藤博文さんとは提携できませんな。」

進歩党「右に同じく、提携できませんな」

…ということで、第三次伊藤博文内閣は、自由党・進歩党との提携にどちらも失敗。そのため、やむなく、政党とは提携せず、内閣を元勳(のちの元老)などの大物政治家ばかりで大臣を構成した**元勳内閣**として組閣したんだ。その陣容は、首相は伊藤博文、蔵相は井上馨、陸相は桂太郎、海相は西郷従道、文相は西園寺公望など、のちに元老となる大物ばかり。こうした大物の威厳によって、地租増徴案を押し通そうとしたんだ。

そして、地租増徴案を衆議院に提出したんだけど、政党にとっちゃあそんな元勳(元老)なんてもん関係ない。いくら内閣が大物で構成されようが、地租を上げてしまったら、自分たちを支持してくれている国民の支持を失ってしまう。そもそも、自由党や進歩党など民党のももとのスローガンは「民力休養(地租を下げる)」ことなんだから、地租を上げたら公約違反になっちゃうもんね。だから、**自由党**と**進歩党**はそんな第三次伊藤博文内閣の**地租増徴案**を**否決**したんだ。…ところが、これに対して、もう伊藤はブチ切れ。

伊 藤「あ〜、もうガッペムカつく！ふざけんなよ、もうお前らなんかとやっつけられるか、バカヤロウ。お前らはもうクビだ、クビ。つまり解散だ。衆議院解散だ、解散〜！」

…と、衆議院を解散してこれに対抗した。衆議院が解散になると、もう一回衆議院議員を決めるために、解散総選挙が開かれるよね？だから、この後に総選挙が開かれるわけだけど、この選挙は自由党も進歩党も絶対負けられないよね。もし次の選挙で負けたら、地租を上げられちゃうんだから。そこで、今回の選挙だけは地租増徴を食い止めるためにはどっちも絶対負けられないということで、今まで考え方の違った自由党と進歩党の2つの政党が合体することになった。こうして、**自由党と進歩党**が合同した**憲政党**という政党が出来上がったんだ。この2大政党がくっついたんだから、もう鬼に金棒でしょ。絶対に負けるわけもないよね。その結果、総選挙では憲政党が圧勝し、見事に議席の過半数をゲットしたんだ。そして、この責任をとって第三次伊藤内閣は総辞職。

[F] 隈板内閣ーテキスト P65 対応ー

さて、伊藤博文内閣が総辞職したので、次の首相を決めないとならない。首相を決める際には、まず元勳(元老)たちで話し合っ、それを天皇に推薦するんだっただよね？そこで、その後次の首相どうしよっか〜ってことで、元老みんなで話しあったんだ。元老のメンバーとは、伊藤博文や山県有朋、松方正義・黒田清隆・井上馨などだけど、その話し合いの中で、「憲政党の奴等々に一度内閣をやらせてみよう」と強く主張した人物がいたんだ。それが伊藤博文。つまり、伊藤博文からすると「あいつら(自由党・進歩党の合同した憲政党)は毎回地租増徴とかに反対してくるじゃん？それだったらさ、あいつらに一度内閣やらせてみりゃいいんだよ。そうすりゃ、どれだけ政治が難しいか奴等もわかるだろ。まあ、どうせすぐに政治運営の難しさに直面して崩壊するだろうけどな。」ってことだ。そこで、伊藤博文の強い推薦によって、**1898 年**、ついに初の政党による内閣が誕生したんだ。それが、最初の政党内閣である**第一次大隈重信内閣**だ。

今までの内閣(政府)は伊藤博文や黒田清隆・山県有朋・松方正義など、政府の人間が首相に任命されていたよね？自由党や進歩党など政党の人間で首相に就いた人はいなかった。ところが、この大隈重信が首相に就任したことによって、初めて政府の人間じゃなく、政党の人間による内閣が出来上がったんだ。具体的に言うと、内閣総理大臣だけでなく、陸・海軍大臣を除いた全ての大臣が憲政黨員で構成されていたってことね。だから、首相だけでなく外務大臣や大蔵大臣・内務大臣など全ての大臣に、憲政黨員が就任したわけだ。その中で、首相に就任したのが旧進歩党のトップである大隈重信であり、内務大臣に就任したのが旧自由党のトップである板垣退助だったんだ。だから、この二人が中心となったので、この第一次大隈重信内閣を大隈の「隈」、板垣の「板」から隈板内閣と言う。

ところが！確かにこの内閣は憲政党だけで構成されているけど、もともと憲政党というのは自由党と進歩党という別の意見をもつ政党が、地租増徴案に反対するためにくっついた政党でしょ？だから、地租増徴に関しては反対という同じ意見だけど、それ以外の部分で考えが異なる部分が多い。つまり、もともと意見の違う奴らがくっついたわけだから、旧自由党の連中と旧進歩党の間では対立が起きやすかったんだ。まあ、何かと問題とかが生じやすい状態だったわけだね。そして、それが見事に問題として起きてしまう。それが、1898年の共和演説事件だ。これは旧進歩党系の尾崎行雄という文部大臣がいたんだけど、この人が帝国教育会という教育に関するお茶会みたいなところへ出席したんだ。その席で演説を頼まれ、その際に彼は日本の拝金主義(「金・金・金」って金ばっか大切に日本の考え方)を批判しようと思ったんだ。そこで、例えとして「もし、日本がアメリカみたいな共和制(国民から大統領など国家の代表者を選ぶ政治体制)になったら、金・金ばっか言っている日本人だから、たくさん金を持っている三菱とか三井みたいな金持ちが大統領になっちゃうんじゃないの？」と皮肉ったんだ。ちなみに、もう一回言うけど、尾崎行雄はこれを「仮の話」として話したんだ。

ところが、この内容を新聞(東京日日新聞)が完全に拡大解釈。「尾崎行雄文部大臣の発言は天皇に対する不敬だ。日本は天皇制なのだから、三井とか三菱が大統領になるなんて発言するとは、天皇を敬っていない不敬な発言だ。」なんて騒いだんだ。尾崎は「例えの話」として言ったんだけどね、ちょっと拡大解釈しすぎだよね。でも、結局この発言が国会とかで政治問題化してしまっ、いろんなところから叩かれて、結局尾崎行雄は文部大臣を辞任する羽目になってしまった。それが共和演説事件だ。

ただ、まだ問題は終わらない。その尾崎行雄文相が辞めちゃったんだから、その尾崎の後任決めなきゃいけないよね？ところが、ここで問題発生。次の文部大臣をめぐって旧自由党の奴等と旧進歩党の奴等が争いを始めちゃったんだ。つまり、「次の文部大臣は旧自由党から出そう！」「いや、次の文部大臣は旧進歩党の方から出そう！」と、その後釜をめぐって内紛が起きちゃったわけだね。結局、次の文部大臣には旧進歩党の犬養毅が就任したんだけど、この争いをめぐって、憲政党は旧自由党と旧進歩党で対立して内部分裂してしまったんだ。

そして、その旧自由党系の連中は、旧進歩党系の人々を憲政党から追い出して、そのまま憲政党って名乗った(中心は星亨)。そのため、逆に追い出されてしまった旧進歩党系の連中は「何言ってるんだ。俺たちの方こそ本物の憲政党だ！」ということで作ったのが憲政本党だ。こうして大隈重信内閣は、憲政党が内部分裂してしまったため、たったの4カ月で内閣総辞職することになったんだ。

[G] 第二次山県有朋内閣ーテキスト P65 対応ー

だから、伊藤博文たち元老からしてみれば「それ、見たことか。政党の奴等にはまだ政治なんて無理なんだよ」って感じ。試しに政党に内閣を担当させてみたわけだけど、たった4カ月で総辞職してしまったんだからね。そのため、今度の首相は再び政府側の人間が就任することになったんだ。その新しく首相に任命された人物が山県有朋だ。

さて、では新しく出来上がった**第二次山県有朋内閣**の重要な課題は何だろう？それは、先ほどの第二次松方正義内閣・第三次伊藤博文から続く地租増徴案だ。結局地租増徴案は自由党・進歩党が合同した憲政党に否決されちゃったから、実現されていなかったよね。

でも、こうした地租増徴案を実現するためには、やっぱり政党と提携しておかないと成立させることはできない。だって、第三次伊藤博文内閣は政党と提携しなかったために、地租増徴案に失敗して総辞職する羽目になってるわけでしょ？だから、山県有朋もその伊藤博文の失敗を目の当たりにしているから、さすがに政党を無視することはできない。そこで、旧自由党系の憲政党と提携することで地租増徴案を成立させようと考えたんだ。

だから、この**第二次山県有朋内閣**は旧自由党系の**憲政党**と提携することにした。そして、この憲政党と提携することで地租増徴案を可決させようとしたわけだね。でも、そう簡単に憲政党だって地租増徴案をOKするわけじゃないよね。そこで、憲政党側に「地租増徴案にOKしてくれたら、大臣の椅子をたくさんあげるよ」って条件を出してあげたんだ。そして、それでも納得しない連中には買収などを行って、何とか地租増徴案を成立させたんだ。これによって、**1898 年に地租増徴案が可決**したため、地租は今までの**2.5%**から**3.3%**へと引き上げられた。

こうして、山県は憲政党と手を組むことによって地租増徴案を成立させたわけだ。でも、実は山県有朋はチャキチャキの軍人で、大の政党嫌いの人間として有名な人物…。ここから、山県の憲政党への裏切りが始まる。憲政党は大臣ポストをもらえると信じて、山県の地租増徴案に賛成したわけだよ。でも、山県からすれば、もう地租はアップさせた。つまり、地租増徴という目標はもう達成できたわけだ。…とゆうことは、もう政党と手組む必要ないんじゃない？もう政党は用済みでしょ。ぶっちゃけ、地租さえ上がればもう政党の協力なんていらないの。だから、もう完全に手のひら返したように、「もうよ～、地租は上がったしよ～、お前ら政党の協力なんて必要ないんだよね。て一か、お前らみたいな政党が勢力伸ばしてくること自体、俺気に食わないんだよね。だから、お前ら政党が勢力伸ばせねえような法律作っちゃう！」と、その政党の力を抑えるための法令を制定していったんだ。

その一つが 1899 年の**文官任用令改正**。これはあくまでも「改正」だからね？もともと、文官任用令が制定されたのは 1893 年のことなんだけど、その制定の年は聞かれなくて改正されたものが聞かれる。これは簡単にいうと、現在の国家公務員試験 1 種にあたる、**文官高等試験**という文官(官僚)になるための試験を難しくして、政党の人間が官僚に進出しにくいようにするための法令。官僚というのは、外務省とか大蔵省で働く専門的な知識をもった役人のことだったよね？でも、今まではその官僚になるための試験がそんな難しくなかったの、結構楽に政党の人間が官僚になることができたんだ。官僚というのは、政策の具体的な内容を計画する役人たちだから、政治に及ぼす影響力も結構大きい。政党の人間たちがこうした官僚になってしまったら、政治に影響力を持ってしまうよね。そこで、その官僚になるための試験(文官高等試験)を改正して、政党の人間が官僚になりにくいようにしたわけだ。そうすれば、専門知識がない政党の人間は簡単に官僚になれなくなるからね。

簡潔に述べれば、山県有朋は政党の人間が官僚に進出するのがウザかったから改正したんだ。このように、官僚と呼ばれる人々は政策の具体的な内容を考えるわけだから、それだけ政治に対する影響力が強い。だから、山県有朋は政党よりも、こうした官僚たちを自分の支配下において影響力を及ぼそうと考えたわけだ。つまり、彼ら官僚を自分達の手元に置いておけば、実際の政治を牛耳ることができる。そこで、山県は彼ら官僚を保護するため、官僚を守るための法律を作ったんだ。それが**文官分限令**と**文官懲戒令**の二つ。前者の文官分限令は、内閣が交代したとしても、その内閣が勝手に官僚をクビに出来ないという法律で、後者の文官懲戒令は恣意的に自分で勝手に官僚をクビに出来ないという法律だ。

こうして山県有朋は官僚を自分の勢力下に置くことで政治をリードしようとした。そして、もう一つ。授業でも何度か述べたように、彼は陸軍の創設に多大なる影響を与えた人物だ。そこで、軍部に対する政党の影響力を阻止するため、1900年に軍部大臣現役武官制というものを制定したんだけど、こいつは簡潔に述べれば軍部の都合をよくするための法令。

基本的に陸軍大臣とか海軍大臣とかを任命する時には、軍のことに精通していないとまずいので、陸軍大臣なら陸軍の人物、海軍大臣なら海軍の人物から任命する。ところが、この大臣になれる人物は、陸・海軍の現役の中将か大將じゃなきゃいけないってことに限定したんだ。大將とか中將というのは軍部の中でも相当偉い人たち。具体的には、ある程度の偉い身分になると、「少尉→中尉→大尉→少佐→中佐→大佐→少将→中將→大將」と出世していく。わかりやすく言うなら、ワンピースに出てくる大將・中將を考えてみよう。大將はアオキジ・キザル・アカイヌの三人のみで、中將で思い当たるのはルフィのおじいちゃんのガープ中將など。バスターコールをかける時には、中將クラスがやってくるわけだし、大將・中將がどれだけ偉い人たちかわかりやすいよね(ワンピース知らない人は置いていきます)。

このように、陸軍・海軍大臣にはごく一部の偉い人しか入れない。じゃあ、何でそれが軍部にとって都合がいいことになるのか？例えば、ある内閣が軍部にとってはあまり好ましくない軍縮などの政策を行おうとしたとしよう。陸軍や海軍がそれに反対しているなら、彼らは陸軍・海軍大臣を出さなければいいんだ。大將が「私はこの内閣とは意見が合わないので大臣に就任しません。」そして、他の大將・中將も「私も大臣には就任したくありません」と就任を拒否する。そうすると、その内閣は陸軍・海軍大臣を出せなくなり、大臣の席が空席になり内閣が構成できなくなる。そのため、内閣を構成できないまま総辞職しなきゃいけなくなっちゃうわけだ。つまり、内閣の政策が気に食わなかったら、軍部で一斉に大臣にならないストライキを起こしてしまえばいいわけだね(この軍部大臣現役武官制を利用して、陸軍は大正時代・昭和時代に何度か内閣を倒すことになる)。

<軍部大臣現役武官制>

将官	大 将 中 将 少 将	} <u>軍部大臣(陸軍・海軍大臣)は「現役」の大將・中將からのみ任命される</u>
佐官	大 佐 中 佐 少 佐	
尉官	大 尉 中 尉 少 尉	
准士官	准 尉	
下士官	曹 長 軍 曹 伍 長	
兵	一等兵 二等兵	

さて、この他にも第二次山県有朋内閣の行った政策を見てみると、1900年には治安警察法を制定したり、同年に衆議院議員選挙法を改正して、選挙権を直接国税 15 円以上から 10 円以上に切り下げている。まず、前者の治安警察法は労働運動や社会主義運動を取り締まるための法令なんだけど(細かくは明治時代の「社会主義運動」の箇所ですく詳しく解説しよう)、実はこの法律は集会条例(1880)を引き継いだ法令なんだ。具体的には、軍人や警察官、官立の学生や女子・未成年者は政治活動に参加

してはならない(第5条)とか、労働者が労働組合を結成したり、ストライキを起こすことを実質的に禁止(第17条)したものなんだけど、こんな法律を出したら当然人々は不満を感じるよね。そこで、アメとムチを使い分けて、衆議院議員選挙法を改正して選挙権を拡大してあげたんだ。今までの衆議院議員選挙法における選挙資格は、直接国税15円以上を納入している25歳以上の男子だけだったよね。でも、15円以上は高すぎる。全人口でそれを納めることができる人は1.1%しかいないしね。そのため、そうした声を反映して、選挙資格を「直接国税15円以上納める25歳以上の男子」から「直接国税10円以上を納める25歳以上の男子」に切り下げてあげたんだ。これによって、選挙権を持つ人口は全人口の先ほどの2倍にあたる2.2%に増えることになった。なお、このように第二次山県有朋はいろいろな政策を行っているよね？そのため、「第二次山県有朋内閣の行った政策のうち異なるものを次の中から選べ」とかいった問題も多く聞かれるので気をつけておこう。

[H] 立憲政友会の結成ーテキストP65 対応ー

このように第二次山県有朋内閣は、自らの出身である軍部や、政策の細かな内容を決めていく官僚を守る法律をつくり、彼らを勢力下におくことで自分の支持基盤としていった。それに対して、政党には「お前らはもう用済みなんだよ」的に、その勢力を抑えつけるための政策を行っていったわけだ。

だから、さすがに今まで第二次山県有朋内閣と提携していた憲政党もこれに気づいた。

憲政党「て、てめえ山県！てめえ俺らと提携すると言っておいて、地租を上げるためだけに利用しやがったんだな～！」

山 県「へっへ～、バレた？」

憲政党「くっそ～、俺たちは用が済んだら捨てられちまうティッシュのようなもんだったわけか！もう、こうなったら俺たちは山県内閣との提携は断絶しよう」

…ということで、ついに憲政党も山県内閣との提携を断絶することになった。山県有朋は政党を毛嫌いしているから、これと結びついていても利益がない。…かといって、政府と提携をしないと、憲政党も自分たちの利益を確保したり、支持基盤である地方農村のインフラ整備を実現していくのは難しい。じゃあ、政府の人間の中で、自分たち憲政党と結びついてくれる人間はいるのか？

それには一人、伊藤博文がいる。伊藤博文といえば、第三次伊藤内閣の時に政党と提携しなかったために、地租増徴案を自由党と進歩党によって否決され、そのあげく総選挙で自由党と進歩党が合同した憲政党に総選挙で敗北しているよね。だから、伊藤自身は「政党の重要性」について、身にしみてわかっている。なおかつ、先ほど山県有朋は軍部・官僚などを保護し自分の影響下に置くことで支持基盤にした。一方の伊藤博文は自分の影響下にあるものがない。山県有朋と権力をめぐって争うためには、伊藤博文も自分の支持基盤が必要になる。それならば、ちょうど良い存在がいるよね。山県との提携を断絶した憲政党(旧自由党系)だ。こうして、憲政党と伊藤博文が歩み寄るようになる。そして、憲政党は伊藤との提携に積極的に乗り出して、ついに1900年、憲政党のトップ星亨が伊藤博文に憲政党を無条件献上し、伊藤博文が総裁に迎え入れられる形で立憲政友会が出来上がったんだ。つまり、もともとあった憲政党のトップに伊藤博文が就任することで立憲政友会と名称が改められたわけだね。

でも、憲政党もずいぶん腐っちゃったもんだよね。なぜなら、「憲政党は以前の自由民権運動を展開していた自由党の頃には、国民のために政府に対して抵抗を続けていた政党。しかも、その自由党を弾圧していた時の政府の中心人物は伊藤博文そのものだ。そんな自由党が今となっては、自分たちを弾圧していた伊藤博文と仲良くして結びついてしまった。自由党もずいぶん落ちてしまったものだな」と新聞で批判した人がいたんだ。それが当時『万朝報』という新聞の記者として活躍していた幸徳秋水だ。彼は、その万朝報に「自由党を祭る文」という記事を書いて、憲政党を批判したんだ。

自由党を祭る文『万朝報』by 幸徳秋水

歳ハ庚子に在り八月某夜、金風淅瀝として露白く天高きの時、一星忽焉として墜ちて声あり、嗚呼自由党死す矣、而して其光榮ある歴史は全く抹殺されぬ。……汝自由党の起るや、政府の抑圧は益す甚しく迫害は愈々急也。……見よ今や諸君は退去令發布の總理伊藤侯、退去令發布の内相山県侯の忠実なる政友として、汝自由党の死を視る路人の如く、吾人は独り朝報の孤星に拠つて尚ほ自由平等文明進歩の爲めに奮闘しつゝあることを。汝自由党の死を弔し靈を祭るに方つて、吾人豈に追昔撫今の情なきを得んや。

(庚子年(1900年)8月のある夜(1900年8月25日、立憲政友会創立の宣言・趣意書が発表された)、秋風がもの寂しく吹き、露が白く輝き、天高く澄み渡る時、1つの星がたちまち墜ちて声があった、「ああ、自由党(論説が掲載された8月30日当時は憲政党。この後の9月15日に伊藤と結んで立憲政友会を結成した)は死んでしまった」。こうして、自由党の光榮ある歴史は全く葬り去られてしまった。……自由党が結成された時は、政府の抑圧が一層甚だしく迫害がますます激しくなっていた頃であった。……しかし、見よ。今では彼らは退去令(保安条例)發布時の伊藤博文首相、山県有朋内相の忠実な政友となつてしまった。自由党の死を見る傍觀者のように、吾人(私。幸徳秋水)は一人朝報(万朝報)を拠点にして、自由・平等・文明の進歩のために奮闘している。自由党の死を弔つて靈を祭るにあたって、吾人(私。幸徳秋水)は昔を思い、今を慈しむ気持ちがないわけではない。)

さて、こうして出来上がった立憲政友会を与党にして伊藤博文が再び首相に就くことになる。それが第四次伊藤博文内閣なんだけど、意外にもうまく政治が機能しない。なぜかという、政府から予算案や法案を衆議院に提出すると、立憲政友会が賛成してくれるから衆議院では通過する。でも、貴族院にいくと、伊藤博文が政党と結びついたことに貴族院議員が反発して、案件を否決されてしまうから。そのため、貴族院で法案・予算案を反対されまくってしまい、半年で退陣することになってしまったんだ。

＜明治期の政党の覚え方＞

「自由 か〜い、チンポ けえせ(返せ)と hot say you」
自由党 改進黨 進歩党 憲政党 憲政本党 政友会

この後、山県有朋も伊藤博文も政界の第一線からは退くことになる。首相になって内閣を運営していく場合には、ストレスとかも相当溜まるだろうしね。ただし、第一線からは退いても、首相にはそれぞれ自分の後継者にあたる人物を起用して、首相や大臣を推薦する元老として裏から政治を動かすようになっていったんだ。

まず、山県有朋の後継者として、首相に指名されたのが陸軍大将の桂太郎(山県有朋と同じ長州藩出身)。山県有朋は先ほど軍部や官僚を自分の支持基盤においていたよね？だから、この桂太郎も官僚・軍部などの藩閥を支持基盤として政治を運営していく。それに対して、伊藤博文は1903年に枢密院議長に就任したので、その後継者に指名したのが西園寺公望(立憲政友会2代総裁)。彼は伊藤博文の後継者なので、立憲政友会をそのまま自分の支持基盤にする。こうして、これ以降は第一次桂太郎内閣→第一次西園寺公望内閣→第二次桂太郎内閣→第二次西園寺公望内閣→第三次桂太郎内閣という桂・西園寺が交互に首相に就く桂園時代と呼ばれる時代になっていくんだ。

＜明治期の内閣の覚え方＞

「い く や ま い ま い お や い か さ か さ か」
伊 黒 山 松 伊 松 伊 大 山 伊 桂 西 桂 西 桂
藤 田 県 方 藤 方 藤 隈 県 藤 園 園
寺 寺